大阪市大はなぜ静かなのか

大阪市立大学の統合再編が気にかかる。日本経済新聞 8 月 28 日夕刊が、新大学基本構想を他紙より詳しく伝えているので紹介したい。

大阪府立大と大阪市立大の運営法人「公立大学法人大阪」は 27 日、府市の「副首都推進本部会議」で、2022 年 4 月の統合で誕生する新大学の基本構想を公表した。25 年度に大阪市・森之宮地区に 1、2 年生の基幹教育などを担う都心メインキャンパスを新設する方針を正式に表明した。

新キャンパスの事業規模は推計 1000 億円。松井一郎大阪市長は会議後、「民間投資の仕組みをつくりたいと思っている。税投入を抑える方法を検討する」と話した。基本構想によると、府立大の 4 学域、市立大の 8 学部を 1 学域 11 学部に再編する。農学部、獣医学部、看護学部を独立させ、大学院に新たに情報学研究科を設ける。

新キャンパスで行われる 1、2 年生の基幹教育では、グローバル化と情報社会への対応を重点的に磨く。英語は卒業までに語学力の国際標準規格「CEFR」の「B1」以上（英検 2 級程度）のレベルを目指し、数理やデータサイエンスの授業も全学で展開する。文学部や生活科学部などを新キャンパスに置く方向だ。2025 年国際博覧会（大阪・関西万博）のコンセプトと同じ「未来社会の実験場」として整備し、大阪城東側の街づくりの中核とする。都心のシンクタンク機能を担えるようにデータマネジメントセンターも設置する。新大学の学部入学定員数は約 2800 人となり、国公立大では大阪大、東京大に続く 3 位の規模になる。運営法人は今後、府市と協議を進めて 20 年 2 月の府市両議会で関連議案を提出。同年 10 月に文部科学省へ認可申請し、22 年 4 月の開学を目指す。

写真は大阪市立大の全学共通教育などが行われているキャンパス。図書館に行くとき通るコースだ。大学祭関係のタテカンは目にするが、大学の統合再編や移転についての看板やビラを見たことがない。

大阪市大の教職員や学生・院生は、大阪府大との統合再編、さらにキャンパスの一部移転をどう考えているのか。「維新政治」もとで、大阪「都」構想絡みの大学統合に、市大関係者は文句も言えないのであろうか。教職員だけでなく、学生・院生の皆さんに聞きたい。こんな一方的な政治絡みのやり方に、疑問を感じないのだろうか。その前に、学生・院生の皆さんにきちんと説明されているのだろうか。

私のような 1960 年代後半に大学、70 年代前半に大学院で学んだ世代にとって、理解しがたい。大阪市大の図書館に通いながら、「なぜ静かなのか」と疑問に感じている。

（2019 年 10 月 8 日）